慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想家としてのウキリアム・モリス（二）
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.8 (1921. 8) ,p.1138(76)- 1151(89)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210801-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

なつたのである。この場合には娘は十九歳に達せざる内に結婚すればその妹ある時はその妹に資金を讓渡し、妹のない時は montes に沒收せられ、猶規定の年齡に到達せざる内に夭折すれば同じく資金は沒收せられる規定であつた。

社會思想家としての ウヰリアム・モリス（二）

加田哲二

三

William Morris と Burne-Jones とが Oxford の生活を始めたのは、千八百五十三年の一月の末であつた。當時の Oxford は舊時の狀態から近代化しやうとする過渡期にあつた。鐵道も程近くまで完成し、近代的氣分は段々とこの舊い學問の町へと押し寄せて來つゝあつた。けれども、彼等兩人が College の生活を始めた時分の Oxford は未だ舊い中世紀の俤を多分に持つてゐた。Morris に云はせると「灰色の屋根の家と曲つた道筋と、多くの鐘の音のするところ」であつた。「鐵道線路に接してゐないところは何處でも、町は宛かもその周圍に城廓を繞らしてゐるかの如く、急に人家を見ないやうになる。さうして牧場などに出會す。練瓦建の家は、町の中には少ない。家は石造の灰色のものか、貧しい通では礫まじりの黃色のものであつた。また木彫のある家や彫刻物があちこちにあつた。」かう當時の Oxford について Sir Edward Burne-Jones は書いてゐる。大學は十八世紀の建築物で、圖書館は設立計畫中であつたがまだ出來なかつた。さうして當時新築の重要な建築は Beaumont Street にある The Taylorian Institute と繪畫館とであつた。一般の町の建築は多くは第十五世紀のそれであつた。

Oxford の內的生活は、その外面に表はれたところ程中世紀的ではなかつた。中世紀的の思想は既にそこから消え去つたのである。Johnson 博士を知つてゐた Routh が Magdalen College を主宰してゐた。彼がその長い主宰の間に、Oxford 運動（同大學において千八百三十三年から盛に唱導された耶蘇舊教々義の復興及び英國々教遵奉の運動を云ふ。）は去來した。そは千八百四十年においてその頂點に達し、千八百四十五年十月 Newman が Routh を後繼してから衰亡に向つたが、尙ほ勢力あるもので他の諸運動は之に壓倒されてゐる型であつた。そは Oxford をして傳道の中心地たらしめ、外界の刺激と新思想の侵入とを防いだのであつた。けれども革新の氣運は到る所にあつた。Anglo-Catholic 派と舊來の組織の特權に對する自由主義的反動は齎らされた。Congreve は Wadham にあつて Comte の實證主義を熱心に主張し、Jowett は Balliol の主要勢力と認められて來た。かくて Oxford は徐々として外界の侵入するところとなつた。けれども千八百五十三年の Oxford は未だ中世紀の魅力ある呼吸を續けてゐた。

Morris の入學した Exeter College は百二十人程の學生があつて滿員の狀態にあつた。けれども彼は始めの二學期は寄宿に入らなければならなかつた。その教授も極めていゝ加減のもので、形式的のものであつた。かゝる狀態の下にあつて Morris のやうな天才的の青年が學校に對して熱心であることが出來ないのは當然のことであつた。彼の學生監は彼が講義に出席することを見て滿足してゐた。學生監は彼についてその學生簿に次のやうに書いてゐる。「粗野にし

て不洗錬なる青年。特殊の文學的趣味または才能なし。乍然普通の試驗問題について解答を與ふるは何等の困難なきが如し」と。學校當局は斯くの如く Morris を見た。然らば彼は如何な學友を持ち、その學友は彼を何んなに見たか。

Morris と Burne-Jones とは第一學期の初めの二三日で知り合ひになつた。さうして一週間も經つと最早離れることが出來ない位の親友になつた。Edward Burne-Jones は Morris との交友について次のやうに記してゐる。「私共は毎日一處に散歩した。Oxford の第一學期の經驗だけで私は悲しい幻滅と失望とを感じた。そこは不活潑で興味がなかつた。さうして Newman の就職によつて終るまで繼續してゐた刺激の多かつた時代のものは何ものも殘つてゐなかつた。さうして吾々は是等のことに關して、自分達の考へを比較し、憤激しながら午後の散歩に出掛け、夜の讀書には共に机を並べた。私は始めから、彼が、自分の會つたことのある人々の中で最も變つてる人であるのを知つてゐた。彼は熱心に語り、或時には激烈に語つた。私は彼が不活潑で、疲れてゐたのを見たことがない。その時分の彼は瘠せぎすで、その毛は黑褐色で、濃厚であつた。彼は鼻筋が通つてゐて、その眼は帶赤褐色で、口は極めて優しく美しかつた。」(Mackail, Life. vol. I. pp. 36-37)

Morris は Burne-Jones の外に Fulford, Faulkner, Dixon, Cormell Price, Harry Macdonald 達と交遊してゐた。彼は Edward と同じく Birmingham King Edward's School から入學した人々である。Morris と Burne-Jones とは始め主として神學、敎會史、宗敎的考古學に關する著書を讀んでゐた。けれども Morris は既に Oxford に來ない內から讀書を樂しみにしてゐた。彼は當時詩界の權威者であつた Tennyson の詩も讀んでおり、藝術批評家として有名な John Ruskin の "Modern Painters" の最初の二卷も讀んでゐた。さうして Ruskin の藝術批評は Morris と Jones との心に共鳴し、Ruskin は彼等に對して英雄であり、豫言者であつた。かくて千八百五十一年——千八百五十三年に涉つて、彼の "The Stones of Venice" の出版せらるゝや、彼の地位は確定したのである。ゴシック建築の性質（第二卷第六章）と題する章に論ぜられた藝術論は彼等の聖典であり、信條となつた。かくて、その性質において中世紀的であつた Morris は、こゝにその理論的根據を見出したのである。この外よく讀まれたものには Kingsley のもの Carlyle の "Past and Present" がある。Burne-Jones の勸めた Thorpe の "Northern Mythology" は彼に對して新世界を展開した。即ちそは Scandinavia の雄大なる叙事詩を彼に敎へたのである。

Canon Dixon は千八百五十一年六月に、Oxford の Pembroke College に入學を許され、その十月から Oxford の生活を始めたものであるが、彼は、その時代の回想記に次のやうに Morris のことを書いてゐる。「私の入學した次の學期に Burne-Jones は Exter に來て、William Morris は同じ學校に同じ學期から入學したものと思ふ。私は Burne-Jones を訪問して直ぐさま Morris と知り合ひになつた。暫らくしてから吾々は一つの group を作つた。Jones と Morris は僧侶になる筈であつた。Faulkner を除いた他の人達も同樣であつた。けれどもこのことは吾々を結合せしめたものではない。吾々が一つの group を作つたのは、詩と無限の藝術的、文學的の感激からである。……Morris は初め、Pembroke の人々からは、たゞ話しの好きな、船漕の上

手な Faulkner と一處に河へ行くのが好きな非常に愉快な青年と見られてゐた。……さうして此頃の Morris は貴族主義者で、高敎派であつた。彼の行爲と趣味と同情とは、すべて貴族的であつた。彼は容貌は美しく表情に富んでゐた。さうしてその表情は純潔なものであつた。また時々は憂愁の色を帶びてゐた。彼は美しい口附の所有者であつた。……私は當時の彼の秀れて美しい容貌を眼のあたり回想することが出來る。」(Mackail, Life, vol. I. pp. 43-50) Morris の容貌のことについては Cormell Price の妹もその日記の中で書いてゐる。それは千八百五十五年八月二十二日並に二十三日の日記である。日記には次のやうに記されてある。「八月二十二日。Fan(姉)が Morris に會ふために Jones の家に招かれた。Fulford もその席にあつた。Fan は Morris が非常に美しいと云つた。八月二十三日。Fulford, Morris, Jones がお茶と夕飯とに來た。Morris はほんとうに美しい」と。(Mackail, Life. vol. I. p. 83)

四

Morris にとつては最初の休暇である千八百五十三年の長休は英國の諸方の敎會を見物するのに費された。千八百五十四年の休暇に彼は始めて海外に旅行した。彼は白耳義と北部佛國に遊んだのである。この旅行は非常に興味のある旅行で、彼に Van Eyck や Memling やの繪畫を知らしめ、人間の最も崇高なる產物たる Amiens, Beauvais, Chartres の諸寺院を眼のあたり見たのである。さうしてまたこの旅行によつて彼は Albert Dürer の彫刻の寫眞を持ち歸り、Paris の Musée Cluny と Louvre の繪畫館と Rouen において彼は眞實の中世紀の藝術を見ることが出來た。彼は四十年後に發行した小冊子 "The Aims of Art." 1887 (後に Signs of Change 中に收められる。)において當時の旅行を追想する位彼に對しては、顯著な旅行であつた。

翌五十五年の三月 Morris は成年に達して、九百磅の年收ある財產を相續した。かくて彼は從來よりもより多くの自由を享樂することが出來たのである。

その冬 Morris 並に Burne-Jones は新しい室に移つた。このときから Morris の詩才は現はれて來たのである。ある朝食前に彼は Jones にその詩を見せた。それからと云ふものは毎日毎日彼は詩作に從事した。Canon Dixon は當時のことを書いてゐる。「ある夜 Crom Price と私とは Exter に行つた。さうして Morris が Burne-Jones と一處にゐるのを見た。吾々が室に入るや否や、Burne-Jones は大聲に叫んだ「彼は大詩人だ。」「誰が?」と吾々は問ふた。「Topsy さ」これは Jones が Morris に附けた異名である。」Dixon は尙ほ續けて云つてゐる。「吾々は座つて、さうして Morris がその最初の詩、即ち彼の生涯において始めて書いた詩を讀むのを聞いた。それは "The Willow and the Red Cliff" と云つて、私は彼がそれを讀んでゐるときに、前に聞いたことのない程のものであると感じた。それは全然新しいもので、何等前人の糟粕を嘗めることなく、その價値は何れにしても、獨創的のものであつた。……私は後に何が起つたかを想ひ出すことが出來ない、けれども私は、皆んながしたやうに、讃辭を呈した。私は彼がかう云つたのを氣憶してゐる。「これが詩なら、詩を作ることは易しいことだ。」かう云つて彼は一二學期の間毎日新しい詩を持つて私の室へ來たのであつた。」(Mackail, Life. vol. I. pp. 53-54) この最初の詩稿を彼は燒いて

しまつた。そは千八百五十八年の始めに刊行された "The Defence of Guenevere and other Poems" に收められた以外の詩稿を燒いたとき に一處に處分せられた。その當時の詩で殘存してゐるものは、千八百五十五年の復活祭の休暇に、彼の最も年少な、最も愛せられた友人Cormell Price に宛てた書翰の中のものと、その他二三の詩稿を發見することが出來るが、その詩風は Browning 夫人の影響を受けてゐる。當時の彼女はその名聲の頂上にあり、さうして多くの批評家は彼女を第一流の詩人を以て許したのである。眞理と純潔と自由とに對する熱情は、彼女の作物における特色であり、その短所を覆ふことの出來た長所であつた。Morrisはその死に先き立つこと數ヶ月にして、往時を追懷して、彼の初期の詩は Browning 夫人の模倣であると云つた。このことは多少云ひ過ぎた嫌はあるにしても、尙ほそれは眞理である。この時代即ち千八百五十五年の夏に散文の物語を書き始めたが、彼は當時散文よりも詩を好むだので、間もなく詩作にのみ從事した。

Morrisは當時にあつて僧院の建設のためにその全財產を傾倒しやうと云ふ意志を持つてゐた。當時においては斯樣な團體の顯著なるものがあつた。Littlemore における團體はその一であつた。他の地方においても、斯樣な團體が起りかけてゐた。さうして七年前に、Gothic 建築の復興者で當時二十七才であつた大建築家 Street は大學と僧院と仕事場とを併せたやうな團體を建設しやうとしてゐた。Street は千八百五十二年から Oxford に、建築家として住んでゐて、そこの諸寺院を修復し、SS. Philip と James 寺院を建築した。Morris は彼を個人的に知らなかつたが、その影響を受けたのである。Morris のこの計畫は遂に實現されることがなかつたが、その計畫は Oxford and Cambridge Magazine. と Morris & Co. となつて表はれた。

この雜誌發行の計畫は、Canon Dixon から Morris へ提案され、Cambridge の大學からは、Wilfred Heeley が主として協働することになつた。さうして出版者は Messrs. Bell and Daldy と定まり、その名稱は "The Oxford and Cambridge Magazine, Conducted by Members of the two Universities" と稱し、千八百五十六年一月一日を以てその第一號を發行した。毎月一回の發行で一年間は故障なく發行を續けて行つたが、年末に當つて財政上の困難と Morris が專心他のことに從事するやうになつたのと、寄稿者の興味が異つて來たとの事情で廢刊の止むなきに至つた。Oxford and Cambridge Magazine は定價一志（シリング）であつたが、多く流布されることがなかつた。頁數は二段組で六十頁から七十二頁まで、論文、物語、詩歌、新刊紹介に分れてゐた。流布の少ないのに反して、識者からは認められたのであつた。John Ruskin は懇に讃辭を呈して、寄稿の約束さへ與へた。（但しこの約束は果たされなかつた。）Tennyson もその Fulford に與へた書翰において稱讃の言葉を惜しまなかつた。Morris は六月號と十一月號とを除く外、毎號詩と散文とを寄稿した。二月號に寄稿した The Church of North France. No. I. Shadows of Amiens は Amiens の寺院の研究で、Morris の中世紀の建築に對する深い愛と驚くべき洞察との表はれで、Amiens は先年 Burne-Jones, Fulford と共に、佛國旅行を試みたときの一產物であつた。

五

この佛蘭西旅行は Morris に取つて一轉機と

なつたものである。千八百五十五年七月十九日から旅程に登つて、先づ Folkestone を越して Abbeville に直行した。彼等は多く徒歩で旅行した。Morris は Cormell Price に宛てた八月十日附の書翰で鐵道の極めて不愉快にして、旅行のために不適當なることを痛論してゐる。同じ書翰に Gothic 建築について論じて云つてゐる。「吾々は Louviers に行つた。そこには大きくはないが、甚だ立派な寺院があつた。外面は立派な flamboyant 式で所々に窓と欄干とがあつた。內部は非常に立派で華々しく、自分はそれを豫期してゐなかつたので、甚だ驚嘆した。外部は flamboyant 式の壯嚴と冷靜とが表はれてゐた。內部に至る初期の Gothic で甚だ美麗であつた。私は嘗て斯くの如く初期と後期の Gothic の差異を見たことがない。さうして初期のものの崇高なるに打たれたことはない。」かくの如き藝術鑑賞の間にあつて、Morris とその親友の Burne-Jones との心の裡には煩悶があつた。八日の夜に Havre の埠頭を散歩をしながら、二人は遂に藝術家たるべき決心をした。さうして藝術のためには萬事を放擲しやうと決した。彼等は共に僧職に從事する筈であつたが、今や、Burne-Jones は畫家となり、Morris は建築家となるやうになつた。Morris は建築家としての素養が少しもなかつた。けれども彼にとつては建築は大なる意義を持つてゐるもので、すべての藝術の源泉であつた。美しい家は、彼にとつて、生命そのものの表現形態である。

Morris は何故に藝術家となつたか。その原因の一つは物に對する愛である。彼はその頃書いた散文の物語の中に次のやうな意味のことを書いてゐる。自分は常に人から意志の弱い、忍耐力のない人間と云はれてゐる。けれどもそれは誤りである。自分は善と惡とに對して最も強い意志の力を持つてゐるのだ。然し自分にはあることが出來ることだが出來ぬことだか直ぐに判るのである。さうしてもしそれが不可能のことであるのなら、全然打ち捨てて顧みない。けれどももしそれが出來ることだとすると自分は傍目も振らずにそれを仕遂げるのだ。自分の心の裡にある愛、それに對する熱情、さう云つたやうな感情が自分をその方へ向ける。さうして色々な事から事へと移つて行く。さうすると世の中の人は自分を意志の弱い人間だと云ふのだと。その他の原因を揚げて見るとそれは Rossetti の影響と、彼の現代的精神即ち科學的精神への反抗として藝術の世界へと入つて行つたのである。この彼の將來の行くべき道を變更したことは彼の家族に對して失望と驚愕とを齎らした。彼はこのことについて長文の書翰を、自分の母に送つた。それは千八百五十五年十一月十一日附のものである。

愛する母上樣

私は一二ヶ月前に私が僧職に從事しないと申したとき眞面目ではないとあなたがお思ひになつただらうと思つております。さうしてもしそのことが事實であるとするとこの手紙はきつとあなたを悲しましめるでせう。然し、あなたが私が眞面目だと云ふことが御判になれば、あなたは私の決心を喜ばれるでせう。私は嘗て的もなく遊んでゐると云ふことは惡いことだと云つて下すつたことを記憶いたしております。私は充分この非難を受けまいと決心いたしております。私は、自分の考へゐるすべてのことをあなたには御話しいたしませんでしたが、私は前からさう云ふ積りでおりました。さう云ふ譯は私は自分自身について充分に考へることがなかつたのと、私が僧職につかないでゐると云ふ考へをあなたに理解して頂くために時間を與へるためとであつたのです。私は今や建築家にならうとしております。それは私が僧職に就かうと考へてゐた間にも屢々熱望してゐた職業なのです。その職業を私が熱望してゐたことはあなたにもお判りであつた事でせう。私はあなたがこの職業に對して理由ある反對の御意見のあることも想像することが出來ます。さうして今私はこの反對を取り除かうと思つ

てゐます。第一あなたは僧職の準備に對して金を費したとお思ひになるでせう。然しこの點については御安心下さい。何故と云へば大學教育は精神の訓練に適してゐるのです。さうしてもし初めて會ひ、さうして愛し合つた友人の忠實で眞實な愛があり、この愛が何れ程の價にも見積られない程のものであり、何處で幾何でも買へないとしたならば、あなたの命は無意味に費されたのではないでせう。またもし大學教育が受けることによつて最も馬鹿な最も悪い聖の卑悪が見て、日々その卑悪を憎むことを覺え、さうしてそれと闘はふと望むならばそれでいいでせう。……

私は何事にも偉大にならうとは思はない。けれども私は自分の仕事で幸福になりたいと思つてゐるのです。私は遊んでゐて、何もしないでゐると愉快な考へは何處かへ消えてしまうのです。あなたはこの手紙を簡單のことに對して長い愚かなものだとお思ひになるでせう。然し私の考へてゐることを充分に書いて、例へ不成功にしろ、自分の感情を了解して頂いて置くのは、自分の取るべき道と考へたからです。それに先日この問題についてお話したときはあまりに簡單で、さして自分の無精から、心からお話しすることが出來ませんでした。そこで私は今その足らなかつたところを少しく補ふ積りでこの手紙を書いたのですが、果たしてそのことが成功しましたらうか。

尙ほこのことについて詳しくお話し申すと、私はロンドンの Street の弟子にして貰ふつもりであります。彼はいい建築家で、非常に多くの仕事を持つております。さうして常に名譽ある人とされてゐます。私は自分の欲してゐることを彼から修得することが出來ませう。然しもし彼に弟子入することが出來ませんでしたら、ロンドンの他の建築家と交渉して見ませう。さうすれば、あなたがロンドン附近に續いて住んでおられれば、一處に生活が出來ますから。この種の仕事には私は既に年を取り過ぎてゐます。だから早ければ早いだけ、よいと思ひます。けれども條件の不利と云ふことは自分で償ひませう。

Henrietta と伯母さんその他の方々によろしく。

William

二伸この手紙は Henrietta の外に誰にも見せないで下さい。(Mackail, Life. I. pp. 86-89)

自分の決心を母に傳へた Morris は幸にして Street との交渉も旨く行つて千八百五十六年一月二十一日にはStreet との契約書に署名し、さうして Beaumont Street (Oxford) の事務所に働くことになつた。こゝで彼は、彼よりも少し年上の Philip Webb と知り合ひになつたのである。彼はこの新しい職業に熱心と徹底とを以て從事した。彼は數ヶ月間にたゞの一回しか休んだことがなかつた。それは彼が Oxford から Bachelor の稱號を貰ふときであつた。この多忙な生活の間にあつて Morris は詩と物語とを書く外に、木彫も石彫も粘土細工もした。友人と交際も絶たなかつた。

Burne-Jones は今や London にゐて Rossetti の下にあつて繪畫の修得に餘念がなかつた。Morris は土曜日の午後 Oxford を出てロンドンへ行き彼と共に Academy その他で繪畫を見、日曜日一日を彼と共に送ることを常とした。この間に彼は Dante Gabriel Rossetti と相識るに至つたのである。彼が Rossetti と相見えたのは千八百五十五—六年のクリスマス休暇にロンドンを訪ふたときにある講演會で會つたことがある。けれども眞に相識るに至つたのはこの Jones の紹介を以て始めとする。數ヶ月にして Rossetti の影響は甚だ大なるものがあつた。Rossetti はすべての人が畫家でなければならないと云ふ意見を持つてゐた。彼の強烈な人格と魅力ある辯舌とは甚だしく人を影響するの常であつた。それに Street の事務所における彼の仕事は興味のない許りでなく、あるときには憎悪を催す底のものもあつた。

この晩夏(千八百五十六年)にあたつて Street の事務所は Oxford から London へと移つたので Morris も共にロンドンへ來た。さうして Burne-Jones と共に住むことになつた。當時の Morris の心理は七月に Oxford から出した手紙の中に明かである。「貴君にお目に懸つてから二度 Rossetti にあつた。この前の日曜日のことである。私は一日彼と暮した。私達がゐた所に Hunt がやつて來た。彼は脊の高い、瘠せた、

美しい赤い腮鬚を生して、どちかと云へば上向きの鼻で奥深い黑い眼を持つた美しい人である。……Rossetti は云つた。私は繪を畫かなければならぬ。私は出來ると彼は云つた。彼は非常な偉人で敎師のやうではなく、權威を以て語るので、私は試みなければならない、私は多きを望まない。けれども私は全力を盡さう。彼は私に實際的の注意を與へて呉れた。……だから自分は建築を捨てずに、事務所の仕事の外に一日六時間だけ繪が畫ければいいと思つてゐる。こんな調子の生活では快樂を得ることがないだらう。けれどもそんなことは關はない。私はそれを要求する權利はない。愛と仕事、この二つだけあれば足りる。……私は政治的社會的の問題に興味を持つて取扱ふことは出來ない。私は大體において、事柄が混亂してゐるのを知つてゐる。さうしてそれを少しでも正しくする能力も天職もないことを知つてゐる。私の仕事は、ある形で夢を實現することである。もし私がこの繪畫を修得することが出來るならば、しなければならないことは澤山あるだらう。私は失敗するだらうとは思はない。だが私は自分の機會の少ないのを知つてゐる。だが私は自分のなさなければならない仕事のあることを喜んでゐる。私は大さう小さい藝術の宮殿に入ることにあつた。……Ned（Burne-Jones のこと）と私は一處に住まうとしてゐる。私は八月の始めにロンドンへ行く。」Mackail, Life. I. pp. 109-110）

かくの如く Morris の計畫した二重生活は、當分の間行はれてゐたが、遂にその煩に耐えることが出來なかつた。繪畫に對する彼の熱心は段々と募つて來た。殊に秋の間に Street と一處に Low Countries を訪問したことは繪畫に對する熱心を更らに增した。さうして遂に千八百五十六年の末にこの「夢の體現者」は Street の事務所を去つたのである。（未完）

拾九世紀初期に於ける英國都市生活の一面（一）

奥井復太郎

一

アークライトの機械的發明と共に開かれた時期は唯に英蘭のみならず全世界の經濟史上に於ける新時代の開始であつた。

此の時代は人類の自然に對する支配力の增大を語る一つの大なる場面であるが、生產並びに交通の新しい近代的方法は地球上に於ける何れの國の古き社會的秩序の維持と並存する事が出來なかつたので是等古き秩序や慣習は徐々に或は急激に破壞された。かくて一七七〇年から一八八四年に亘る七十年間に英吉利に起つた產業革命は其の國が全面を隈なく變化してしまつた。（Cunningham, Growth of English Industry and Commerce. modern times, part II Laissez-faire. 609-613 pp. 參照）

アッシュレエに依れば產業革命と云ふ名稱は、トインビイが一八八四年に出版した同じ名稱を表題とする講演の中で此の期間に生じた出來事が實に「革命」と呼ばれても不都合でない程に完全にして且急激な變化を社會に齎したと云ふ事を明らかにして以來廣く唱へられるに至つたのである。（W. J. Ashley, The Economic Organisation of England. 1914. p. 140）E. P. Cheyney も產業革命に齎された工場工業制度の各方面に及ぼした影響からして此の時代の變化に對して「產業革命」と云ふ名辭を用ふるのは誇